今日のイラスト 549　「 イラストでたどる石州街道⑥ 吉富簡一邸」　古谷眞之助

イラストでたどる 石州街道 06 吉富簡一邸

天保9年（1838）、吉富簡一は矢原で代々大庄屋を務める吉富家の長男として生まれ、17歳にして当主となった。前回の林勇蔵とは親戚筋に当たり、若年で大庄屋となった簡一にとって勇蔵は良き師でもあった。

また湯田に住んでいた井上馨とも仲が良く、元治元年（1864）、袖解橋で彼が刺客に襲われた時には所郁太郎を呼んで畳針の手術によって救ったことは有名な話である。晋作の決起に呼応して簡一は、慶応元年、井上を総督とし、自らは参謀となって鴻城隊を結成した。同隊の明木での藩政府軍との戦いの勝利の陰には簡一の見事な采配があった。このため、以後山口県議会議長時代も含めて彼は「矢原将軍」と呼ばれたという。

文・イラスト＝古谷眞之助

今回の主人公、吉富簡一は大庄屋の家に生まれているが、大庄屋というのは、長州藩の行政区分である各宰判の民生部門のトップである。長州藩には 18 の宰判があったから、大庄屋は現在で言えば市長には匹敵するだろう。権限と共に大変な地主でもあった。そして庄屋を束ねるのが大庄屋である。もちろん藩からも各宰判には責任者が派遣されており、これは代官と呼ばれた。ただし代官が各宰判に滞在するのは3、4 か月であり、主として年貢取り立て時だったと何かで読んだ気がする。そのため大庄屋には大変な力が付与されていた。そういう訳で名字帯刀も許されていた。もともと大庄屋なり庄屋のルーツを辿ると、長州藩の場合、その多くが武士階級に至ると言われている。関ヶ原の戦いに敗れて 10 か国 112 万石から防長 2 か国 37 万石までに厳封されて生き延びたのだから、その際に多くの家臣に暇を出さざるを得なかった。その時に、たとえ武士の身分は捨てでも藩主に仕えたいという者たちがともに防長に移動して土着し、百姓となったと言われている。彼らにはそれなりの素養があったから、やがて自然と庄屋となり、中でも特に優秀な者たちが大庄屋となったという流れであったのだろう。今回の主人公、吉富簡一の祖先にしても、恐らく同じだと考えて間違いない。萩往還で紹介した明木の瀧口家も大庄屋である。ともかく大庄屋とは、下級武士とは比べものにならない力と資力があった。

幕末、高杉晋作は挙兵と同時に山口、小郡宰判の大庄屋に対して資金と人員の援助を頼んだ。勿論、当時の藩からは奇兵隊には近寄るな、相手にするなという御触れが出ていたが、それに抗うように特にこの二つの宰判では大庄屋が中心になって積極的に金も出し、人員も派遣した。それだけに維新後も、例えば山縣有朋が林勇蔵に会った際には臣下の礼を取ったと言われているのである。そして林勇蔵、吉富簡一、瀧口吉良らは明治初期の山口県政をリードしていくことになる。ところで、この付近を歩かれる時に注意して欲しい場所がある。それは、吉富邸近くの上矢原高関から湯田の境下市橋までは湾曲するように大きく道が曲がっていて「大曲り」と呼ばれているエリアである。他には見られない特徴的な街道なので必見。車道は真っすぐに修正されているが、この「大曲り」はそのまま残り、道沿いには水路もあって往時の雰囲気を今もしっかり偲ぶことが出来るので、街道歩きの際には見逃さないでいただきたいものである。（2022.10.2 記）